

教員養成大学における音楽科教育の授業内容に関する一考察

—— ピアノ簡易伴奏の習得過程を中心に ——

A Study of Contents of Music Education in Teachers' Training University
—— Process of Learning to Play Simplified Accompaniment on the Piano ——

岩 崎 洋 一

Yoichi Iwasaki

後 藤 薫

Kaoru Gotou

(1988年9月8日 受理)

I はじめに

学校教育の流れは10年を一つの単位として学習指導要領が改定され、新しい流れで出発しようとしている。

それとともに、教員養成機関、とりわけ小学校教員養成が児童の減少や社会的状況の変化とともに大きく変容を迫られている現在、教育内容、方法、それに施設、設備など教員養成大学の内的、外的に抱えている問題は多岐にわたっている。

その中で、教育の担い手である教師に目を向けると、子どもたちの心の育成を重点として、子どもたちの学習を保障する教師の資質、力量が問われている。そして、音楽教科を見てみると、ピアノを弾くという行為が音楽の授業を豊かに展開していく上での一つの大きな力となっているのである。

そのことは教員採用試験の課題にも現れており、九州地区の各県や政令都市の教育委員会が課している昭和64年度の小学校教諭の音楽に関する選考試験の内容は次の通りである。

- ① 歌唱教材のピアノによる弾き歌い：福岡県、福岡市、北九州市、佐賀県
- ② バイエル教則本のピアノ・オルガン演奏：長崎県、熊本県、大分県
- ③ 歌唱教材のオルガン演奏：宮崎県、沖縄県
- ④ ピアノ：鹿児島県

これらを見ると、全ての県、市でピアノ・オルガンによる演奏が課せられており、小学校におけ

る音楽教科で最少限必要な技術・技能として、鍵盤楽器を使つての音楽授業の展開が望まれていると見ることができよう。

このピアノ指導については、小学校教員養成の音楽科教育を問題にする時に、他大学においても高い関心が払われており¹⁾、数多くの学生を学習時間や学習空間の制約の中で、教育者として子どもたちに相対していけるだけの内容、方法、技術をどのようにして身に付けさせるかという課題が横たわっているのである。

そこで、本研究では、このピアノ学習の意味や目的をおさえた上で、簡易伴奏の習得過程を中心に、指導内容をどのように設定し、展開していけば良いかをピアノ指導法として模索し、提示するものである²⁾。

そのために学生の実態を把握する意味で、授業(15週)の開始時と終了時にアンケート調査を実施し、どのように学生の意識、音楽内容が変化してきたかを探り、今後の指導のあり方に検討を加えるものである。

II 現状分析

1 本学における授業形態

小学校課程のピアノ学習は主に音楽科教育法I A(半期)で実施しており、1クラス60名~70名を一人の教官で担当している。

従来ピアノ学習の多くは、個人教授のシステムが取られており、能力の異なった学習者の個々に

応じた教育がなされてきたが³⁾、本学では演習として位置づけられている関係上、一斉授業の形態が基本である。しかし、個人の技術修得面が強く現れるピアノ学習では、基礎的内容を一斉授業で行った後、個別な指導を適宜取り入れているのが現状である。そして、課題を修得していく過程として、学生が教師の立場でピアノを弾くことを模擬的に設定し、一人ずつ短時間の間に順番に全員の前でピアノを弾くことも組み込んでいる。このことは個人レッスンによる教師一人の評価と違い、数多くの他者からの評価がなされていることから、課題の修得にとって密度の濃い学習形態といえよう。

2 アンケート調査と考察

アンケートは無記名とし、項目の多くは記述式とした。そして得られた解答から類似した内容の意見を集約し、表1から表8までにまとめたものである。

(1) 授業開始当初の調査

- a 調査日 昭和62年11月6日
- b 対象 音楽科教育研究ⅠA受講生131名
小学校課程 体、家、教職の2年生を中心に、授業時間内で実施。

表1 小学校教師として必要と思われる音楽の基礎的能力は

| 内 容 | 人数 | % |
|-----------------|----|----|
| ・歌唱教材がピアノで弾ける | 82 | 63 |
| ・色々な楽器が弾ける | 23 | 18 |
| ・読譜力 | 21 | 16 |
| ・歌唱力 | 6 | 4 |
| ・音楽の良さを子どもに伝える力 | 6 | 4 |

100%になっていないのは複数の解答を集約しているためであり、未解答の場合もある。(以後同様)

表1では、情意面から音楽の良さを伝えていく、とした意見もみられるが、音楽科教育研究ⅠAの授業内容からして、多くの学生がピアノが弾けることを一番目にあげており、楽器の奏法や読譜力を音楽の基礎として促えていることがわかる。この他に、感受性や鑑賞力をあげている学生も若干名いる。

表2 音楽科教育研究ⅠAの授業でどのような力を身につけたいですか

| 内 容 | 人数 | % |
|--------|----|----|
| ・ピアノ奏法 | 89 | 68 |
| ・読譜力 | 22 | 17 |
| ・弾き歌い | 15 | 11 |

表2では、学生自身が教師になるにあたって必要と感じている基礎的技能をこの授業で習得しようとする姿勢が良く現れている。この他、楽典の知識や具体的な指導方法についての意見がみられる。

表3 ピアノ学習の到達目標はどのレベルまで考えていますか

| 内 容 | 人数 | % |
|--------------|----|----|
| ・歌唱教材の伴奏ができる | 45 | 34 |
| ・バイエルが弾ける | 26 | 20 |
| ・弾き歌いができる | 8 | 6 |
| ・指が思い通りに動く | 7 | 5 |
| ・ポピュラー曲が弾ける | 6 | 5 |

表3では、やはり実際の授業を想定して歌唱教材の伴奏ができることを一番にあげているが、バイエル教則本が弾けるというのは、この授業の試験課題の一つとしてバイエル教則本より曲が選定されていることも大きな要因と思われる。この他、簡易伴奏付けができるようになりたいとした意見や、強弱やテンポの変化など曲想を考えた次の段階まで進みたいとする意見もみられる。

表4では、約半数の学生はピアノを弾くことが初めてであり、一年未満を入れると6割強がピアノを自分の意志でもって弾きこなすところまで到達していないことがわかる。その他、6年以上継続して習ってきた学生も多くみられ、授業内容の展開において学生個々のレベルの違いが大きいと思われる。

表5では、ピアノ練習を積極的に促している学生が多く、意欲をもって取り組もうとしているが、

表4 これまでピアノ（鍵盤楽器）をどの程度やってきましたか

| 内 容 | 人数 | % |
|-----------|----|----|
| • 経験なし | 67 | 51 |
| • 半年 | 11 | 8 |
| • 1年 | 6 | 5 |
| • 2年～5年 | 12 | 9 |
| • 6年～10年 | 27 | 21 |
| • 10年～15年 | 8 | 6 |

表5 ピアノを練習することについて

| 内 容 | 人数 | % |
|---------------------|----|----|
| • 楽しみにしており、積極的に弾きたい | 89 | 68 |
| • 大変難しそうで不安 | 69 | 53 |
| • 練習したくなく仕方なくやる | 33 | 25 |

半数の学生がピアノ学習の未経験者であるために、読譜力やピアノ奏法を含めた理論、知識、技術の獲得に不安を抱えている姿がある。また、練習したくなく仕方なくやる、とした背景には、履習せざるを得ないとした制度上の問題と、精神的な不安感が交錯しているものと思われる。

(2)授業終了時の調査

- a 調査日 昭和63年2月19日
- b 対 象 音楽科教育研究 I A 受講生128名
授業当初のアンケート対象者と同じ。

表6 音楽科教育研究 I A の授業はいかがでしたか

| 内 容 | 人数 | % |
|--------------|----|----|
| • 楽しくできた | 92 | 71 |
| • 難しくてできなかった | 25 | 20 |
| • しかたなしにやった | 11 | 9 |

表6では、ピアノ練習を当初、大変難しそうで

不安を感じていた学生が5割強いたにもかかわらず、楽しくできた、という意見が7割を占めたことに驚きを感じる。これは、当初難しいと思っていたピアノを弾くことが、練習をすれば思った以上に上達することに自分自身驚いている。という意見が多数みられることから、当初の目標に少なからず到達し、あるいは充足できたことへの結果と思われる。ただし、3割の学生は精神的に満足が得られず、苦痛を伴った学習であったことがうかがえる。

表7 ピアノ練習ではどのような面に苦労しましたか

| 内 容 | 人数 | % |
|------------------|----|----|
| • 指が思うように動かない | 74 | 58 |
| • 読譜に時間がかかる | 30 | 23 |
| • 両手で合わせて弾くのが難しい | 14 | 11 |
| • 練習する時間がない | 25 | 20 |

表7では、やはり10本の指を独立させて自分の意志で動かすことの難しさを感じている学生が一番多く、それとともに、読譜力の差がピアノ学習の上で進度に大きな影響を与えているといえる。その他、空いた時間が少なく、ピアノ練習に時間を割くことができない悩みや、暖房面、練習室のピアノなど、施設、設備に関する意見がみられた。

表8 簡易伴奏について良い面と問題点

| 内 容 | 人数 | % |
|-----------------------------------|----|----|
| 長所 | | |
| • 楽譜が複雑でなく弾きやすく曲の途中で止まることが少ない。 | 43 | 36 |
| • 実践向きで他の曲にも応用できる。 | 10 | 8 |
| 短所 | | |
| • 単調になりやすく、音楽の内容が伴いにくい。曲の特徴がでにくい。 | 38 | 30 |
| • 曲に合った和音を見つけられない | 8 | 6 |

表8では、ピアノ指導の初期段階での歌唱教材の簡易伴奏付けは、この簡易伴奏がもっている特徴としての簡便さが有効に働くが、反面、音楽表現の幅を制限してしまうことになり、裏腹な関係になっていることがわかる。このことから、ピアノ学習の導入期では、簡易伴奏は音楽表層の理解と表現を行ううえで一つの手法であろうが、次の段階として深層に迫る本伴奏に移行できるピアノ学習の展開が必要となろう。また、簡易伴奏においても、分散和音の音形を曲の味わいによって変化させる工夫が望まれるといえる。

Ⅲ ピアノ学習の目的及び簡易伴奏の段階的指導法

1 ピアノ学習の目的と使用教材

ピアノの指導過程を述べる前に、ピアノ学習のもつ有効性について考えてみたい。

ピアノによる音楽学習では、①楽譜を理解し、読み取り、表現していく過程が、教材選択や教材研究に際しての基礎的な能力となると思われる。また、②声楽や他の楽器と異なり、音域の広さと強弱の変化など幅広い音楽表現が可能であるといえよう⁴⁾。

次に、小学校教員養成でのピアノ指導の直接目標を考えてみると、日々の音楽学習を展開するにあたっての、①歌唱教材の伴奏（簡易伴奏）、②器楽教材の伴奏及びアンサンブル演奏、があげられよう。そしてその内容としては、①読譜力を含めた楽典の学習、②機能と和声の理解、③ピアノ奏法の基礎技能の学習、が大きな位置を占めているといえよう。

ここで音楽科教育研究ⅠAで使用している教材について考えてみよう。

主に使用している教材は「バイエル教則本」と「教科書歌唱教材」であるが、簡易伴奏を習得するにあたり、それらの教材をどのように応用し反映させているかを見てみたい。

「バイエル教則本」については、これまで問題点の指摘が行われてきているが⁵⁾、この授業で「バイエル教則本」を使用する意図は、教育現場での簡易伴奏や器楽教材の伴奏などの技量を獲得させるための基礎段階として、①主要三和音の和声構造の理解、②主要三和音の伴奏付けの実際、③簡易伴奏の和音の音形が各楽曲の左手のパターンと一致し、応用ができる。ということがあげられよう。

それ故、それらの奏法の基礎を体得させながら、

次の段階として「歌唱教材」を用い、これまでの基礎的な奏法と主要三和音を連動させた簡易伴奏付けをしていくものである。

それでは次に、実際に授業で行っている簡易伴奏の指導過程を述べてみたい。

2 簡易伴奏の段階的指導法

簡易伴奏の指導を実施するにあたっては、小学校音楽の教材を用いている。これらは、教育現場に出れば即指導していかなければならないものであり、その意味からも学生に練習或いは習得意欲を持たせることができるであろうし、簡易伴奏の教材としても比較的容易で、導入には適していると思われる。

小学校音楽の教材としては数社から教科書が出版されており、各々共通教材をはじめとして数多くの楽曲が載せられている。

この教材の分析を通して、教師として最低限身につけなければならない主な項目は以下である。

①調性……C, F, G, a, d

②拍子……2拍子系, 3拍子系があり、それに適応した伴奏型の習得

③和声……主要3和音、及びその連結の習得

④リズム……J, ♩, ♪等

⑤曲想……伴奏型とも照らし合わせて、レガートやスタッカート等の奏法の習得

これらのことを簡易伴奏の指導の中に組み入れていき、限られた期間で多くの学生に習得させる方法について述べていきたい。

(1) 視唱と暗唱

学生に簡易伴奏を習得させるための第一段階として、まず、読譜力を養うことから始める。

ピアノに関しては、指番号や鍵盤の並び方、或いはドの位置を理解した上で、実際に弾いて慣れることが大切である。しかし学生の中には、楽器演奏以前に音符を読むことに労をなしている者も多く見られる。そのため、譜読みの間違いに気付かず演奏したり、読譜に時間がかかるので、演奏がスムーズに進行しない等の例もある。これに対し、比較的スムーズな演奏をする学生は、楽譜を暗譜して鍵盤上の運指の方に注意力を傾けているため、ミスタッチも少ないようである。

以上のことから、読譜力を養い、さらにその読んだ譜面を覚えてしまうことがスムーズな演奏への早道かと思う。

これらのことを授業中に行うために、視唱と暗唱を講義の前半に多く取り入れる。

小学校音楽の教材として取り扱われているもの

は、大半が学生にとって耳慣れたものである。しかしそのために耳覚えに頼ってしまい、細かい所で音譜の読み間違いや聴き覚え違いがでてくる。つまり、正確に読譜をしていない者がいるのである。

そこで、これらの教材を講義の中で取り上げ、読譜・視唱・暗唱を全員に経験させることを通してこのような事を減らしていきたい。そしてこの視唱・暗唱によって徐々に読譜力も向上し、鍵盤に集中して演奏できるようになり、さらにはスムーズな音楽の流れへとつながるのではないかと考えるのである。

(2) 右手奏

学生が読譜に少しづつ慣れてきたら、鍵盤奏の第一歩として(1)の段階で暗唱してきた教材を右手で弾くことから始める。

講義の中で階名唱して覚えた教材のメロディーを右手で弾くことから始めれば、学生にとって鍵盤奏導入が容易なものになるであろう。さらに最終目標でもある教材に簡易伴奏を付けて弾く段階においても、先に述べた読譜の間違いや、音楽の流れが滞るようなことは減るものと思われる。

次に、右手奏した教材のメロディーを左右の指番号の認識、及び指の練習も兼ねて両手で弾くようにする。

左右で同じ旋律を弾くことは比較的容易なので、この段階で教材の中からできるだけ多くの曲を取り上げて学生に経験させ、以後の展開へとつなげていくことが必要であろう。

また学生がメロディーを演奏する際には、ピアノ経験者や教官が第2ピアノを担当し両手カデンツ等による伴奏を添えることで、より演奏意欲を高めることが出来るし、聴こえてくる伴奏を意識

させることで、これから学ぼうとする和声感をも養えるのではないかと思う。

(3) 左手奏

左手奏の指導は、簡易伴奏の習得を念頭において進めるものである。そのため、左手の指の訓練を含む技術の習得よりも、和音及び和音の連結(カデンツ)を弾けるようになることが中心となってくる。

尚、伴奏付けの方法としては、右手でメロディーを担当し左手で和音伴奏を行う片手伴奏と、メロディーは弾かず両手でカデンツを基にして演奏する両手伴奏が考えられるが、現在は前者を中心に指導している。それは、実際に小学校で教材を教えるにあたって、和音伴奏のみでは正確に歌うことのできる児童が多くないという状況から、片手伴奏の習得を第一に取り上げた方が良いと考えたのである。

ではカデンツの提示と鍵盤奏導入について述べていきたい。先にも述べたように、簡易伴奏における左手の役割は和音奏が中心である。そのため、和音を正確に鍵盤上でとらえられ、さらに和音記号の変化にも対応出来るように、カデンツを用いてそれを順を追って指導していく。

まず最初に行うことは、両手カデンツのベースのみを取り出して弾くことである。これは単音ということもあり容易に演奏できるであろう。(譜1参照)

次に、各和音の構成音から2音を取り出しそれを用いてカデンツを弾くことへ進む。この練習を通じて、指広げや指狭め・指のポジションの移動等が正しく行えるように指導する。(譜2参照)

これらの2音によるカデンツが弾けるようになれば、構成音をすべて弾くようにする。(譜3参照)

譜1

譜1の楽譜は、Cメジャー調の和音進行を示している。最初のシステムは、I (C)、V (G)、V7 (G7)、I (C) の順で和音が展開する。2番目のシステムは、I (C)、IV (F)、V (G)、I (C) の順で和音が展開する。各和音は、右手で構成音のグループとして示され、左手は単音で示されている。

譜 2

I V V(7) I I IV V(7) I

I V V₇ I I IV V₇ I

譜 3

I V V₇ I I IV V₇ I

I V V₇ I I IV V₇ I

このように和音奏を段階的に進めていくと、いきなり3つの音を同時に弾くことに難色を示していた学生にも効果的である。また、これらは次に述べる両手奏とも結びついてくるので、十分な練習を積み和音記号に即対応できる程度に迄指導を行う。

さらにこの左手奏の指導においても、示されたカデンツに合った教材を選び、そのメロディーを教官又は鍵盤楽器経験者に担当させる方が望ましいことは言うまでもない。

(4) 両手奏

両手奏は、先の右手奏・左手奏の課題がある程

度弾きこなせるようになった時点で取り入れていく。

その指導は左手奏で示したカデンツの段階的練習を用いて行うもので、つまり右手はメロディーを弾き、左手はそれにふさわしい和音記号に合わせて最初はベースのみで、次に2和音を用いて、最後に3和音でというように順に進めていくのである。またこの指導は、学生の演奏能力と照らし合わせて行うようにしなければならない。(譜4参照)

簡易伴奏をするためには、左手で正確に和音を掴みさらに和音記号の変化にもスムーズに対応で

譜 4 (1)

I I V I I V

I V I I V I

譜 4 (2)

I I V I I V

I V I I V I

I I V₇ I I V₇

I V₇ I I V₇ I

譜 4 (3)

I I V₇ I I V₇

I V₇ I I V₇ I

教育芸術社 1年「ぶん ぶん ぶん」

きることが必要であるが、鍵盤未経験の学生にとって、それは容易なことではないようである。よって、個々の学生の能力に応じて、いつでも2和音やベースだけの伴奏型に戻って練習させる心構えを持っていなければならないと思う。

また、教材のメロディーにふさわしい和音進行を滞ることなく弾きこなせるようになるために、和音進行の難易別に教材を選択しておき、それを

順に練習させるようにすれば効果的であろう。例えば、① I - V₍₇₎ - I ② I - IV - V₍₇₎ - I ③ I - IV - I² - V₇ - I 等である。(譜5参照)

尚、ここに示してある I² - V₇ - I の進行に関しては、I - V₍₇₎ - I や I - IV - V₍₇₎ - I を用いる教材を十分習得した上で、発展という形で指導していきたい。

譜5 I - IV - V₇ - I の進行を用いた教材

I I IV I
 I I IV I
 V I V I
 I IV V I

教育出版社 1年「手をたたきましょう」

I - IV - I² - V₇ - I の進行を用いた教材

I IV I I I V₇ I I
 I I IV IV I² V₇ I I

東京書籍 3年「春の小川で」

譜6 片手伴奏型の一例

The image shows five staves of musical notation, all in bass clef. The first two staves are in common time (C). The third staff is in 3/4 time. The fourth and fifth staves are in 3/4 time. Each staff begins with a star symbol (☆) above the first measure. The notation includes chords, single notes, and rhythmic patterns. The first staff has two star markers. The second staff has one. The third staff has one. The fourth staff has three. The fifth staff has one.

(5) 様々な伴奏型の習得

両手奏の段階で述べたことが習得出来れば、次に各々の教材にふさわしい伴奏型を選択しそれを演奏出来るようになる。

伴奏型としては拍子に伴って様々なものが考えられるが、次に示す譜6の中の印のついた形は最低限習得させておきたいものである。

これらの伴奏型を用いて教材を弾く前に、鍵盤演奏が困難な学生には、左手奏で示したカデンツに様々な伴奏型をあてはめて片手だけを練習させる必要がある。

また、教材をもつ曲想を生かすことのできる伴奏を選択させるにあたっては、この講義の頭初から教材を歌ったり範唱レコードを聴いたりすることにより、選択能力を感覚的に育てていきたいと思う。これは、教材中に示された強弱記号や曲想記号を表現しようとする意欲にもつながるであろうし、その教材のもつ魅力、例えば音楽を通して児童に何を伝えたいか等の発見にもなるであろう。

この段階での学習は教育現場での音楽の授業に直結するものであるため、教材に適した和音の選択と伴奏型をしっかりと身につけさせなければな

らない。(譜7参照)

(6) 両手カデンツを用いた伴奏法

小学校での音楽の授業において教材の伴奏をする場合には、右手でメロディー、左手で伴奏という形を用いた方が良い。それは、児童にとってメロディーの提示なしに歌うというのは、まだ音楽的経験が浅いこともあって困難を伴う場合が多いからである。

しかし、高学年になり十分な練習が行われた合唱の最終段階や輪唱或いは器楽演奏等には、両手カデンツを用いた伴奏は有効であり、片手伴奏に比べて広がりのある楽曲に仕上げることも可能である。そのため、片手伴奏を習得した上で余力があれば両手伴奏も指導していく。

この指導は両手でカデンツを弾くことから始まり、それを様々な伴奏型に変化させていくことへ発展させる。その際には連弾という形を取り、教官又は他の学生の弾くメロディーを聴きながら、その楽曲の持ち味を引き出すことのできる伴奏型を考えることを行い、技術の習得のみに偏らず、常に楽譜を美しく表現しようとする心情も学生に身に付けさせたいものである。(譜8参照)

譜7 はずんだ感じにしたい場合

I V₇ I I IV
 I V₇ I V₇ I
 IV I I I V₇ I

なめらかな感じにしたい場合

I V₇ I I IV
 I V₇ I V₇ I
 IV I I I V₇ I

譜8 両手カデンツ

基本型 I IV I² V⁽⁷⁾ I

第1 転回型 I IV I² V⁽⁷⁾ I

第2 転回型 I IV I² V⁽⁷⁾ I

両手カデンツによる伴奏型の一例

両手伴奏の例

System 1: I IV I V
 System 2: I IV I² V₇ I
 System 3: V I IV V I

Ⅳ おわりに

これまでピアノ学習の導入を中心に、主要三和音及びその分散和音による簡易伴奏習得の過程を提示してきたが、今後の発展としては、①歌唱教材の内容に応じた伴奏型の多様化、②限られた調での歌唱教材だけでなく、移調奏も含めた調性の拡大、③音楽表現を豊かにするⅡ、Ⅵ、副属7などの和声の拡大、④機能と声とは異なったわらべ歌の伴奏を容易に行うための、理論学習などが課題としてあげられよう。

また、授業形態としての課題は、①限定された時間内で、多人数の学生個々に対応する学習環境と指導方法、②社会教育の場でピアノを学んできた学生と、初めてピアノに接する学生の技術的能力の差が大きい故に、授業に対する意欲に差が出てくることがあげられよう。これを解決する方法としてアンケート調査では、ピアノの練習方法を自学自習だけでなく、友達に習ったり、個人レッスンに通うとした意見が32名(24%)も見られたのである。今後、学生一人ひとりに対応できるプ

ログラム作りを考えていかなければならないであろう。

その他、これまで行ってきたピアノ指導で導き出された結果として、①具体的な教材に視点をあてることにより、単なる技術面を強調したパターン練習よりも、教材そのものを一部または全部取り出し、楽曲分析を通じた音楽的意味を理解したうえで、技術の習得を図った方が有効である。②そのための楽典を含めた基礎的理論の学習を実技指導の前段階として設定することの順次性を感じるのである。

今後、一義的な目標としての歌唱教材の簡易伴奏や、本伴奏のための技術習得だけでなく、ピアノ学習過程で得た理論、知識、技術などが他の領域への足掛りとなるような、そして、当初の目的としてきた簡易伴奏による歌唱教材の演奏といった段階から、音楽を子どもたちが共有できるための橋渡しとしての音楽表現を可能にする学習内容を、授業の場で創造していくことが求められているといえよう。

注

- 1) 昭和59年度日本教育大学協会全国二部会音楽部門では「教員養成大学、学部におけるピアノ学習に関する諸問題」が取りあげられており、九州地区音楽部門においても度々取りあげられ論議されてきた。また、「音楽教育学」や「季刊音楽教育研究」などに数多くの研究が取りあげられている。
- 2) これまで教員養成機関でのピアノ学習を意図した教則本が数多く出版されており、音楽教育研究協会編「Piano Lesson 60時間」昭和49年。山本秀他「学生のためのピアノ教本」全音楽譜 昭和49年。福島淳他「幼児教育のための実用鍵盤和声」音楽之友社 昭和51年。大沼学朗編「保育・教職課程のための和声学的バイエルピアノ教則本」音楽之友社 昭和52年。中目徹監修「小学校歌唱共通教材・自由教材たのしいピアノ伴奏法」東亜音楽社 昭和56年。西村みほ子編「音楽基礎技能のためのピアノ教本」音楽之友社 昭和58年。大泉免「小学校歌唱共通教材によるピアノ・簡易伴奏法」龍吟社 昭和59年。などがある。
- 3) ベース・メソッドでは有効にグループ学習を取り入れたシステムとして新しいピアノ教育を行っている。本村信之他編「子どもと音楽第9巻」P. 218~238 同朋舎 昭和62年
- 4) ピアノが持っている利点として、①鍵盤があるために音を視覚で確かめることができ、音に対する理解が容易。②和声や音楽理論など、音楽の基礎を学ぶのに便利。③独奏、伴奏、合奏の外、オーケストラ代りにも使え応用範囲が広い、などがあげられる。伊能美智子「ピアノ学習の基礎」P. 11 春秋社 昭和61年
- 5) 「バイエル教則本」がもっている問題点として、機能と声の習得には良いが、伴奏パターンを積極的に移調するなどの応用力を育成する意図がみられない。坂田直子「ピアノメソッド研究」(「季刊音楽教育研究」No. 42) とする見解もある。

参 考 文 献

- 1) 市田儀一郎著 「ピアノ伴奏の基本と奏法」 明治図書 昭和51年
- 2) 小野達治 宮瀬重美 中嶋恒雄編著 「みずから学ぶ鍵盤学習」 音楽之友社 昭和55年
- 3) 大泉 免編著 「小学校歌唱共通教材によるピアノ・簡易伴奏法」 龍吟社 昭和59年
- 4) ロジャー・エバンス著 「誰にでもできるやさしいピアノの弾き方」 日音 昭和57年
- 5) 福岡教育大学音楽科編 「音楽科・表現の指導」 音楽之友社 昭和57年
- 6) 教員養成学部教官研究集会 音楽科教育部会 「音楽科教育の研究」 東京書籍 昭和47年
- 7) 竹内 剛 岩間 稔編著 「総合音楽講座(8)伴奏づけ」 ヤマハ音楽振興会 昭和57年
- 8) 季刊音楽教育研究 音楽之友社 No. 7 No. 51 No. 53
- 9) 小学校音楽教科書 ①教育出版 ②東京書籍 ③音楽之友社 ④教育芸術社